

ふきの品種および系統の休眠特性

1. 試験のねらい

県内のふき生産は、中山間地域を中心に約 20 haあり、現在栽培されている品種は愛知早生及び水ふきである。しかし、同一品種間でも生産力にばらつきが認められ、系統間で休眠特性を中心に差があると考えられる。そのため、生産力を高めるためには品種及び系統の休眠特性を把握し、栽培する必要がある。そこで、県内で栽培されているいくつかの品種及び系統についての休眠特性を明らかにする。

2. 試験方法

10月13日に掘り上げた愛知早生ふき（大阪系）と水ふきの3系統（群馬系・佐野系・馬頭系）を供試し、径1.0～1.2cmの春に伸びた地下茎を2芽残して長さ15cmに調整した後、萌芽前の低温遭遇時間と萌芽後の日長が葉柄の伸びに与える影響について調査した。

低温遭遇処理は2～3℃の低温庫に50、100、400時間保持した後、1/2000 aのワグネルポットにそれぞれ定植し、日長処理については低温にあわせずに1/2000 aのワグネルポットにそれぞれ定植した後、レフランプ（東芝）で16時間日長に電照した。

栽培は間口5.4mの二重被覆のパイプハウス内で行った。施肥量は窒素、リン酸、カリともに2kg/aで全量基肥とした。

3. 試験結果および考察

(1) 図-1に低温遭遇時間の違いによる葉柄長の推移を示した。愛知早生ふき（大阪系）は低温遭遇による葉柄の伸びに対する影響は認められず、休眠はほとんどないと考えられた。

水ふきについては、低温遭遇しないもので休眠が認められ、低温遭遇により、系統間で時間の差はあるものの、休眠打破されると考えられた。

(2) 水ふきの系統間の低温遭遇による休眠打破時間は、群馬系と馬頭系が50時間と短く、佐野系は400時間必要であった。このことから群馬系と馬頭系の休眠は佐野系と比較し、かなり浅いと考えられた。

(3) 図-2に萌芽後の長日下での葉柄長の推移を示した。愛知早生ふき（大阪系）は長日下で葉柄の伸びが大きいものの休眠がほとんどないため、効果は少なかった。

(4) 水ふきは系統間で長日に対する反応が異なり、群馬系と馬頭系はその効果は認められなかったが、佐野系では長日下で葉柄の伸びが良かった。

(5) 以上の結果から県内で栽培されているふきは、休眠のほとんどない愛知早生ふきと休眠のある水ふきに大別され、水ふきの系統間では休眠が浅い馬頭系と群馬系、休眠の深い佐野系に区別された。また、その休眠打破法としては低温遭遇が有効であり、休眠の浅い馬頭系と群馬系は50時間程度でよいが、佐野系では400時間以上必要と考えられた。さらに佐野系については長日条件での栽培が有効と考えられた。

4. 成果の要約

県内で栽培されているふきの品種及び系統について、その休眠特性を把握するため低温遭遇処理と萌芽後の長日処理を行った。その結果、愛知早生ふき（大阪系）は休眠が認められず、水ふきは馬頭系と群馬系が休眠が浅く、佐野系が休眠が深いと考えられた。また、休眠打破法は馬頭系と群馬系は50時間の低温遭遇、佐野系は400時間の低温遭遇または16時間の長日が良いと考えられた。

（担当者 野菜部 本島俊明）

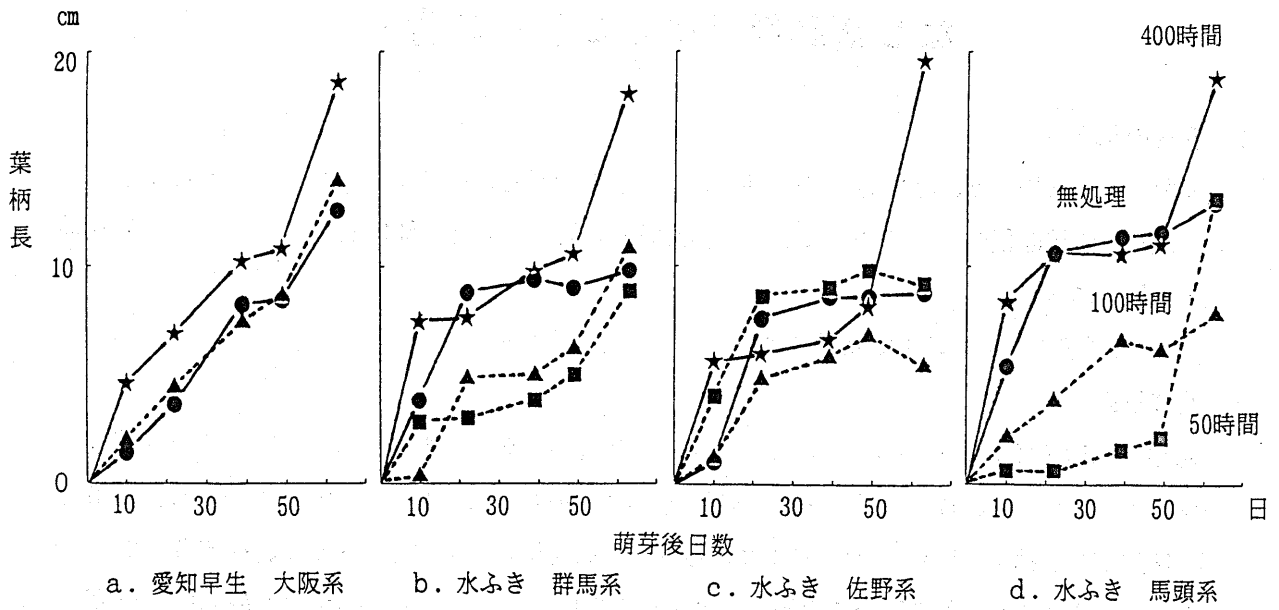


図-1 低温遭遇時間の違いによる葉柄長の推移

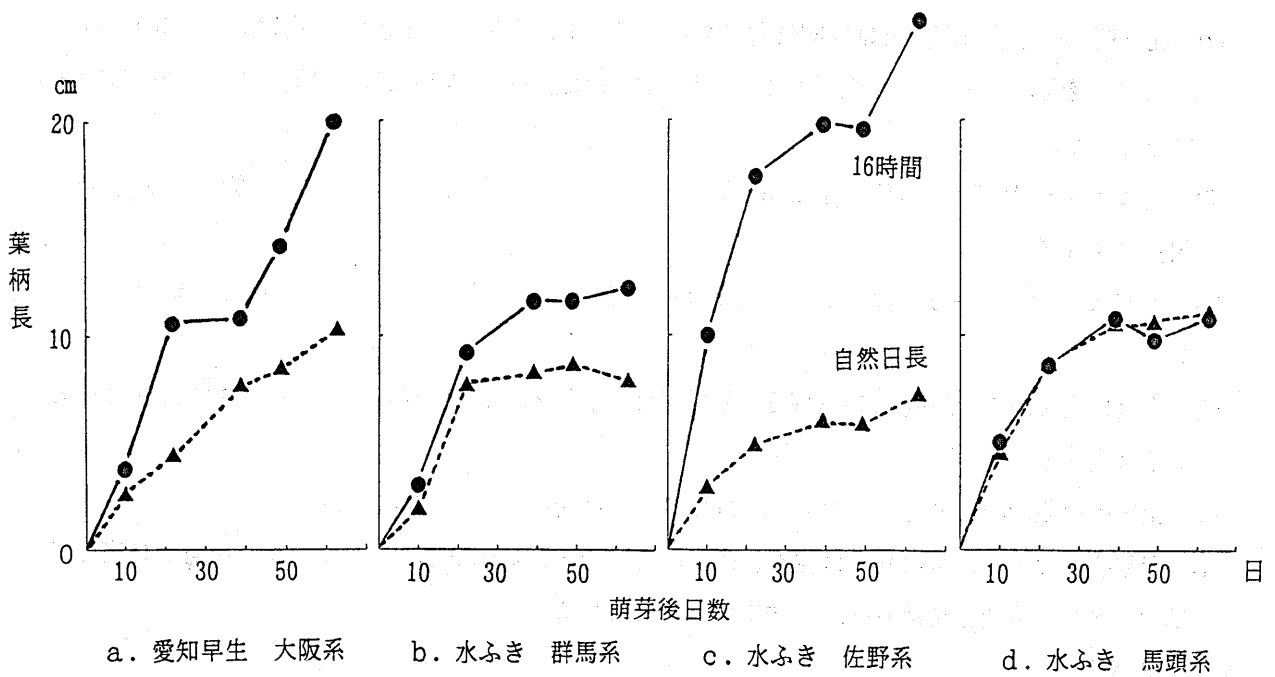


図-2 萌芽後の長日下での葉柄長の推移